

介護と人生

仕事・子育てと
どう両立させる？

日本エルターライフ協会 代表理事
ケアライフアドバイザー

柴本美佐代

最期の迎え方②

最期の迎え方について事前に意思を明らかにしておく方法の一つに『リビングウイル』があります。これは日本語に訳すと『生前指示』で、生命維持装置によって生かされることを望まず、平穏死や自然死を望む人が『いのちの遺言書』として宣言し書き記すものです(日本尊厳死協会による)。

自分の病気が不治かつ末期の時、あるいは高齢化による自然な衰弱である時、延命措置を拒否することができるようになってきました。ですが、リビングウイルがあれば万全というわけではありません。本人と家族の意思が必ずしも一致するとは限りませんし、意思も揺れ動くからです。

「リビングウイル」を真剣に考える



『生きている』とは『生命がある』だけではなく『生活がある』ことです。食べることも、動くことも、意思疎通もできない状態でも、生きているだけで良いという人もいれば、それは生きていることにはならないと思う人もいます。

何歳なら諦められるのでしょうか。平均寿命？ それとも100歳？ それも個人差があり決められませ

36

どう生きたいか話し合うことが大切

ん。リビングウイルがあっても、本人の意思が確認できない状態で判断しなくてはならない時「リビングウイルがあるから医療行為を拒否する」と言えるでしょうか。

だからこそ、まだできるだけ元気な時から、ひとりについて想像し、その時どうするかと話し合うことが重要なことです。縁起でもない拒否せずに冷静に考えてみましょう。最期の迎え方を考えることで、逆にそれまでどのように生きていきたいかを考えることができます。その人にとって生きるとはどういうことか、何を大切にして生きてきたのかを本人と家族が話し合うことが、リビングウイルと同じくらいに必要なのです。

介護は日々の暮らしを支えるだけではなく、生と死に向き合うことです。みとりを話し合うことは、共に生き方を考えることではないでしょうか。